執筆者紹介、彙報、奥付ほか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47778

執筆者紹介

松井　陽介　第37回卒業
桶田幸知香　第63回卒業
畑中　榮　大学院第4回修了
河原　修一　岡山理科大学教授・第29回卒業
團野　光晴　石川工業高等専門学校教授
第38回卒業・大学院第19回修了

集報

会員著作紹介

※著作の刊行がございましたら、ご一報ください。

高山知明著『日本語音韻史の動的諸相と蜆縮涼鼓集（けんしゅくりょうこしゅう）』
（二〇一四年五月刊、二一〇頁、笠間書院、三三〇〇円＋税）

本書は、著者が二〇一二年に筑波大学へ提出した博士（言語学）学位論文「一六・一七世紀日本語音韻の動的諸相」を基に、かなりの加筆修正を施しまとめ直したものである。学位論文は数多くの既発表論文を基礎とするものだが、それらの初出の論文にも大幅な改稿が加えられており、つまりは改稿に改稿を重ねた大変な労作が本書である。そのエネルギーは最初の頁を開いた時から伝わってくる。個人的思い出になるが、著者が金沢大学へ赴任された当時、「金沢の人はガ行鼻濁音がきれいに出る」と楽しげに話されていたことを覚えている。そのような関心が本書にも反映されていると思うと懐かしくも感慨深い。本書各章の分量はほぼ均等であり、注を示す場合にはその登場する頁において脚注で示したり、本文中の内容をまとめるときには適宜表の形で示したり、読者の理解を助けるための神経も細やかに行き届いている。全体構成は以下のとおり。

第1章「序論」、第2章「タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質」、第3章「前鼻子音の変化と話者の感覚」、第4章「前鼻子音から読み解く蜆縮涼鼓集」、第5章「蜆縮涼鼓集の背景―謡曲の発音との関わり―」、第6章「耳障りなザ行音の『発生』」、第7章「二つの変化の干渉」、第8章「終章」、参照文献、資料文献、あとがき、主要語句索引。

本書の目的は「一七世紀頃の音変化を対象に、その動的側面を明らかにすること」（一頁）と書き出しの一文に明確に示される。その考察の中心として取り上げる文献が『蜆縮涼鼓集』である。『蜆縮涼鼓集』は「四つ仮名（ジヂ・ズヅ）」の書き分けを問題にした書として知られ、そのことはつまり「ジヂ・ズヅ」の音韻の混同（合流）を示すものと一般に理解されている。しかし音韻史資料としての『蜆縮涼鼓集』を注意深く歴史的に位置付けて見る時、違った側面が現れてくる。その内容は本書の叙述でも特に力の入った部分とも言え、第4章、第5章では『蜆縮涼鼓集』の書名をタイトルに掲げてもいる。すなわち、「ジヂ・ズヅ」の混同（合流）は、現実の京の「実態」を

写し取ったものではなく、「謡曲における発音指南に基づいて、発音上の問題が整理された結果の産物」（一九三頁）であり、当時の人々にとってはわりあい常識的な内容であったことを明らかにしていくのである。このあたりの論の展開は音韻史には門外漢の者であっても、大変にスリリングで目を見開かされるものがあった。『蜆縮涼鼓集』の諸本比較による本文批判を踏まえ、テキスト内部だけの分析に留まることなく、『和字正濫抄』をはじめとする他書との比較分析から『蜆縮涼鼓集』の「ズレ」を抽出し、そこに「謡曲」という歴史社会的な、いうなればテキストの外側からの視点を照射することで、これまで見落とされてきた音韻史上の問題を浮上させている。そして、第6章ではそれを総括的に日本語音韻史の問題へと還元していく構成となっている。

このような内容・構成を持つ本書の基底には、研究というものに対して持つ著者の強い問題意識とスタンスがある。そもそも古典文献を扱う者は、現代からの目線で評価を下すのではなく、その時代のものはできるだけ同時代に帰して考えることが基本であろう。その点で、同時代の音韻感覚を事例に即して読み解こうとする本書は、広い意味での歴史の書として、信頼を寄せつつ読むことのできる書である。本書全編においてもそうだが、特に序論や第7章において、著者は繰り返し自らの研究上の立ち位置を表明する。すなわち著者は、「一般理論的関心」よりも「個別言語史的関心」（一六四頁）に立つのである。研究というものは普遍性の探究へと向かうものであるが、個々の具体的事象はそう簡単に一般化できるものではない。もちろん単純化イコール理論化ではない。そこで著者は歴史的事象の複雑性のほうに着眼し、個々の変化の具体的側面に即しての「事例」を明らかにしていくのである。「一つ一つの出来事はそれぞれが個性を備えた一回きりの現象である。……そして現象としての一回性には偶発性の問題がついてまわる」（一六五頁）と述べる著者は、あたかも、個別性をもつ人間と人間の、「一期一会」とも言われる偶発性をもった出会いを見るかのように、ひとつひとつ大切にしながら、それぞれの「事例」と向き合っているかのようである。（村戸弥生）

畑中榮著『能登詩情―漢詩で読む能登―』
（二〇一四年八月刊、二五〇頁、うつのみや、一五〇〇円＋税）

石川県図書館協会刊『能登路の旅』『続能登路の旅』の両書は能登紀行文集の近世編として魅力に富むが、その読解には漢詩文の鑑賞知識が必要となり、容易に近づきがたい印象がある。著者は長年にわたり漢文資料の翻刻や注釈に従事し、また郷土の文人たちに関する考察を発表し続けて来た。本書の著者たるに最もふさわしい人であると言える。著者はさらに本書執筆の過程で頻繁に能登を訪れ、実地踏査を重ねることで能登への愛着もいっそう深まったように見える。

主として取り上げられているのは金子鶴村の『能登遊記』と毛利半山の『能登遊囊』である。鶴村の旅は文化十三年（一八一六）の晩春・初夏、半山の旅は嘉永三年（一八五〇）の暮れから五年の暮れにかけて、能登の各地を巡っている。本書ではこの二つの作品に

加えて随所で棉引東海の『能州游賸』（明治二十四年から翌年）に言及し、もちろん『能登路の旅』『続能登路の旅』収載の諸作品を縦横に引用する。

引用すること自体が当該漢詩文の理解を前提とするから、たとえば稿者なら浅加久敬の『三日月の日記』『能登浦伝』の読み方を本書に導かれて深めることができてありがたい。清国の王黍園（明治十六年）、米国のパーシバル・ローエル（明治二十三年）の来訪は棉引東海と同時代であるし、加賀藩前期の浅加久敬が訪れる数年前には、やがて能登島に配所の人となる葛巻昌興が、同じ明泉寺の天石を漢詩に読み上げている。珠洲の三崎には雀踊りが伝わり、それで「北斎漫画」を外浦編の挿絵とするかと気づけることも楽しい。

というぐあいに、口能登・内浦・外浦各地の名所が、歩いて旅する人の視線で再発見され、文学史的・文化史的に広い視野のもとにそれぞれの魅力が語られてゆく。資料編に掲げる諸文献・諸作品や転載絵画資料も合わせて、能登路の旅には必携の行き届いた道案内として活用したい。

（西村）

阪口弘之解説・神戸女子大学古典芸能センター編

『食満南北著『大阪藝談』』

（二〇一六年五月刊、三九六頁、和泉書院、三二〇〇円＋税）

まず著者の名前は「けま・なんぼく」と読む。著者の序文によれば昭和二十年、著者は大阪の芸能――歌舞伎、文楽、落語、春の踊、上方舞、二輪加等について、その「面目」を語り伝えたいとの思いで、『大阪藝談』を執筆した。著者の履歴はやはり序文に「大阪の落語家、桂文屋の家に起臥し、村上浪六の門に遊そび、福地桜痴の門葉として歌舞伎座に入り、仁左衛門、鴈治郎の付作者となり、今齢六十有六」になると言う。

実際、目次を見れば、歌舞伎篇に十三人、上方落語篇に二十一人、文楽篇に七人、大阪俄篇に三人、春の踊篇に五種の踊り、最後が南北篇（村上浪六宅に居候の頃の物語）と、多数の大阪芸人（名人・名優）たちの思い出が満載であり、近代大阪芸能史の貴重な証言集たり得ている。しかも、自身が歌舞伎作者とあって、その語り口が、多く芸人たちの口吻を再現するせいもあろうが、読者を場の雰囲気に引き込む力を持っている。

今回の出版は七十年ぶりに出現し、神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵となった『大阪藝談』（原稿用紙にペン書き）、同じく近年出現した未発表小説『若殿の悪戯』（井上氏蔵。原稿用紙にペン書き）の二編を翻刻し、参考資料として南北が劇団活動を回顧した『劇団三十五年』（阪口氏蔵）を複製、巻末に南北ゆかりの食満厚造氏による「食満南北の思い出」、阪口弘之氏「『大阪藝談』解説」を掲載、さらに『大阪藝談』の索引及び図版一覧を付して、活用の便が工夫されている。口絵の一部を除く図版はすべて阪口氏所蔵資料によるとあり、同氏が長年にわたって収集して来られた番付・パンフレットの類が、それだけでも食満南北の世界、「大阪の匂いいっぱい」を発散している。証言内容や語り口はもちろん、解説者の編集も楽しく意義深い一書である。

（西村）

卒業論文・修士論文・博士論文一覧

卒業論文　二〇一六年提出分

磯部　泰伸　教育物語としての桃太郎
内海　玲奈　『とりかへばや物語』試論　とりかへの意義
―形容語彙による書き分けを手がかりに―
金丸美菜子　小説家としての向田邦子
―『思い出トランプ』に見る男と女―
神田　彩葉　山川方夫作品における「海」
―「海の告発」「ある週末」「一人ぼっちのプレゼント」を中心に―
後澤　翔太　村田喜代子『鍋の中』考
―成長譚としての『鍋の中』―
坂野　環子　三浦哲郎作品における戦争文学の表象について
―「冬の狐火」を中心に―
作田　美幸　ソ系指示詞における語頭の「ソ」から「ホ」への音変化
―金沢方言での談話を分析対象として―
竹中　瑞葉　国木田独歩「竹の木戸」論　―女性と貧困―
外内　都萌　開高健「裸の王様」論
内記三咲野　小川洋子初期作品における死
―「完璧な病室」を中心に―
林　真純　三島由紀夫「弱法師」研究
林　美幸　村上春樹作品の歴史叙述と北海道
―『羊をめぐる冒険』『ねじまき鳥クロニクル』から見る北海道―
本江有梨沙　富山県高岡方言における終助詞「チャ」について
村上　晴香　荻原規子『空色勾玉』研究
―日本神話との関わりを中心に―
渡辺　達弥　夏目漱石『坑夫』試論
―「追い掛ける」という行為を起点として―

修士論文　二〇一六年提出分

馮　暁麗　Vテイク・Vテクルの
アスペクト用法のVについての考察
―十四種の新聞をデータに―
ホドフ・ホーシャ　三島由紀夫における「ブラジル」
―異郷との接触及びステレオタイプの問題を中心に―

博士論文　二〇一六年提出分

上島眞智子　『徒然草』とその時代――人物考証による再検討

編集後記

○『金沢大学国語国文』第四十二号をお届けします。今号は、論文五本を掲載することが出来ました。今後もどうか奮って論文を御投稿ください。「会員著作紹介」欄では、会員の皆様に御執筆頂き、三冊分の書評を掲載しました。御執筆頂きました皆様に感謝申し上げます。御著書の刊行がございましたら、どうか事務局までご一報ください。

○平成二十八年度　研究発表会・講演を十月一日に金沢大学サテライトプラザにて開催しました。初田千乃子氏とクリスティアン・E・ジョルダーノ氏による研究発表の後、中村朱美氏に「五十聯の音の系譜」と題した御講演を頂き、討議や意見交換が熱心に行われました。夕刻から、「ここちや」にて同窓会が開催されました。時間が経つにつれて、在学生と卒業生・修了生が車座となって、和やかな雰囲気のなかで近況を報告し合いました。皆様、ぜひご参加下さい。

（鈴木記）

『金沢大学国語国文』投稿規程

○金沢大学国語国文学会の会員は誰でも機関誌『金沢大学国語国文』に投稿することができます。

○日本文学・日本語学に関する研究であれば、時代・分野を問いません。

○枚数は四百字詰め原稿用紙換算四十枚以内とします。ただし、特別号については、別に定める場合があります。

○投稿原稿の採否は編集委員会で決定します。

○編集委員は、毎年第一回目の理事会で選出いたします。

○投稿論文の送り先は左記宛にお願いします。

〒920―1192
金沢市角間町　金沢大学人間社会一号館
日本語学日本文学研究室内
金沢大学国語国文学会事務局

金沢大学国語国文学会会則

第一条　本会は、金沢大学国語国文学会と称する。

第二条　本会は、会員相互の国語国文学に関する研究の促進と連絡をはかることを目的とする。

第三条　本会は、前条の目的を達するために左の事業を行う。
一、研究発表会・講演会の開催
二、機関誌の発行
三、その他必要と認められるもの

第四条　一、本会の会員は、金沢大学文学部日本語学日本文学専攻・国語国文学専攻および金沢大学法文学部国語国文学専攻ならびに金沢大学大学院人間社会環境研究科（日本語学日本文学関係）および文学研究科文学専攻（日本語学日本文学）・国文学専攻の卒業生・修了生、教員、またはこれに準ずるものとする。
二、元教員・元教官は特別会員とする。

第五条　本会には左の役員を置く。

理　　事	若干名
代表理事	一名
会　　計	一名
会計監査	一名

第六条　一、理事は会員の互選による。但し教官は理事とする。
二、代表理事および会計・会計監査は理事の互選による。
三、役員の任期は一年とする。但し再任は妨げない。

第七条　理事会は本会運営の責にあたる。但し必要に応じて編集委員会等の専門委員を選出任命することができる。

第八条　会務を遂行するため、事務局を金沢大学文学部日本語学日本文学研究室に置く。

第九条　本会の経費は、会費その他をもってあてる。

第十条　会員は機関誌・会員名簿の配布を受ける。会員は機関誌・研究発表会において研究を発表することができる。

第十一条　会則の変更その他重要事項の決定は、総会の議を経なければならない。
総会は、年一回これを開く。

付　則

第一条　会費は年額二、〇〇〇円とする。

第二条　本改正会則は平成十二年四月一日から施行する。

金沢大学国語国文　第四十二号
平成二十九年三月二〇日　印刷
平成二十九年三月二〇日　発行
編　集　金沢大学国語国文学会
発　行　金沢大学人間社会一号館
金沢大学国語国文学会
印　刷　金沢市御影町十九―一
ヨシダ印刷株式会社